書窓

Shoso

No.366　2015.9

太子町立図書館　編集発行

〒671-1561
兵庫県揖保郡太子町鵤
1310 番地 7

Tel (079)277-1580
Fax(079)277-5684

子どもの本だな２３

このページは子どもたちにすすめたい本をとりあげています。本を選ぶときの参考にしてください。

あひるのピンのぼうけん

マージョリー・フラック ぶん　クルト・ビーゼ え
まさき るりこ　やく（瑞雲舎）

あひるのピンは、家族や親せきと「かしこい目のふね」で暮らしています。ピンたちは昼間、岸に上がっておいしいものをさがしてすごします。夕方になりご主人の呼び声が聞こえると船に戻りますが、最後のあひるはお尻をムチでぶたれました。

ある夕方、最後になったと気づいたピンは草むらに隠れ、船は行ってしまいました。次の朝、ピンはおせんべいのかけらを追いかけるうちに男の子につかまってしまい、船に引き上げられて籠の中に。家族はごちそうがやって来たと大喜びしますが、日が沈みかけた時、男の子がこっそり逃がしてくれました。

子どもたちは、お尻をぶたれるのがいやで隠れたピンとともにハラハラする冒険をし、わが家にもどりホッと安心します。絵は動きがあり、揚子江の黄色い水や川の上の暮らしなど、知らない世界を経験できます。読んでもらえば４、５歳から楽しめます。

（西村）

くしゃみくしゃみ天のめぐみ

松岡 享子 作　寺島 龍一 画　（福音館書店）

昔「くしゃみのおっかあ」というおばさんがいました。この人のくしゃみは、牛や馬、家の屋根まで吹き飛ばすほどすごいものでした。おっかあは、子どもが生まれると役場に届けに行きました。「初太郎」という名前を告げようとした時、「はっ、はっ、ハックショーン！」とどえらいくしゃみをしてしまい、戸籍帳に「はくしょん」と書き込まれてしまいました。おかしな名前のせいでからかわれてばかりのはくしょんは、一人前になるとてんぐ山のむこうの大きい村で運だめしをすることにしました。おっかあの一世一代の大くしゃみで吹き飛ばされ、落ちたところは村の長者の家の庭。耳が聞こえず笑ったことのなかった長者の娘がはくしょんが繰り返すくしゃみに笑い出し、はくしょんは婿に迎えられました。(「くしゃみくしゃみ天のめぐみ」)

ほかに、しゃっくり、いびき、おなら、あくびを題材にしたおはなしが四編。どこかのんびりとした心やさしい主人公たちが繰り広げる出来事が、ユーモラスにえがかれています。九歳くらいから。

（片木）

９月・10 月の移動図書館（いずれも木曜日です）

9月	10月					
10日	8日	塚森 地域内 10:30～10:50	沖代 地域内 11:00～11:20	福地(三反長) 地域内 14:30～14:50	米田 公会堂 15:00～15:20	竹広南 公民館 15:30～15:50
17日	15日	岩見構下 公民館 10:30～10:50	岩見構上 公会堂 11:00～11:20	原池団地 公民館 15:00～15:20	山田 掲示板前 15:30～15:50	原 太田東地区農村 交流センター 16:00～16:30
24日	22日	広坂 公民館 10:30～10:50	上太田 公民館 11:00～11:20		吉福 公民館 15:30～15:50	太子 ニュータウン 公民館 16:00～16:30

お知らせ

「幼年物語を楽しむ会」を開きます。

対象：母親・保育者・ボランティア等
日時：11 月～来年３月の第２土曜日(全５回)
10：15～11：30
場所：太子町立図書館 読書会室
申込：10月 24 日（土）までに図書館へ

『流れる星は生きている』　藤原 てい 著

中央公論社　296頁　1984年8月刊　980円　（請求記号）フジ

本書は、著者が、満州を逃れ日本にたどり着くまでの昭和二〇年八月から翌二十一年九月を記した手記。

昭和二〇年八月九日、ソ連参戦の日、著者は六歳、三歳、生後一か月の子どもをつれ、あわただしく満州から脱出、無蓋列車に揺られ北朝鮮の宣川にたどりつく。観象台に勤める夫は仕事の処理をするため、満州にとどまった。宣川では、観象台勤めの家族らとともに丘の上の一軒家で集団生活を送る。厳しい寒さの冬、夜になると子どもたちの足を胸やお腹で温めてやり、防火用水のタンクにできた氷を切り出してきては、バケツで溶かしおむつを洗う。日本引揚のあらゆる話がとびかう中、宣川での生活は長引く。食糧の配給が打ち切られると、著者は、石鹸や、手編みの靴下、人形を売り歩いた。ときには、物乞いをしなければ、子どもに食べさせることができなかった。

二十一年の八月、著者は南下を決意し、二週間分の食糧を下げ列車で平壌へ。平壌から新幕へ。列車を降り、雨の夜道をぬかるむ赤土の山を進むうち、靴を失い、石が足裏に入り込む。子どもを「泣いたら、置いていくぞ！」と罵倒しながら、いくつもの山と川を越える。背中の子は、微熱と下痢が続くが、口に入れてやれるのは、炒った大豆と味噌をとかした水のみ。三八度線を越え、開城で倒れた著者はアメリカ軍に救助される。

我が身が第一になっていく疎開団の生活のなか、日本人にかかわると村八分にされる状況で、器いっぱいの食べ物をそっとくれる朝鮮人や、高価なジフテリアの血清を打ってくれた医師に救われる。さまざまな場面で目にする死、飢え、常に「捕まると殺される」と体力の限りを出して逃げる日々。六十年以上前に出版された著者の体験に、戦争、紛争に苦しむ人がなくなるようにという願いをかきたてられる。

（竹内）

9月の開館日

日	月	火	水	木	金	土
		~~1~~	2	3	4	5
6	~~7~~	~~8~~	9	10	11	12
13	14	~~15~~	16	17	18	19
20	~~21~~	~~22~~	23	24	25	26
27	~~28~~	~~29~~	~~30~~			

10月の開館日

日	月	火	水	木	金	土
				~~1~~	~~2~~	~~3~~
~~4~~	~~5~~	~~6~~	7	8	9	10
11	12	~~13~~	14	15	16	17
18	~~19~~	~~20~~	21	22	23	24
25	26	~~27~~	28	29	30	31

カレンダーの×印は休館日です。
開館は10時～18時まで。
金曜日は20時まで開館しています。

9月28日～10月4日は特別整理のため休館します。
10：00～17：15 返却のみ受けつけます。

地下水

8月21日に、毎年恒例の「おはなしの夕べ」を開いた。今年は詩の暗唱を盛り込み、子ども向けの時間は「王子さまの耳は、ろばの耳」という昔話とマザーグースなどの詩を5編。大人向けの時間は『ライラックの枝のクロウタドリ』（こぐま社）という詩集を中心に、詩ばかり11編。情景をうたった短い詩もあり、昔話のような長い詩もあったが、普段こんなにたくさんの詩を聞くことはめったにないので、私にとって「豊かで深くやわらかい」時間となった。

詩は、短い言葉の中に大きな世界がつまっているような感じがする。一言一句聞き漏らさないよう、イメージを描きながら耳をすませる。そういう緊張感も心地よい。子どもたちが楽しめる、言葉あそびのような詩もたくさんある。これまで、詩の暗唱というとハードルが高かったのだが、毎週土曜日の「おはなしの時間」に、おはなしと合わせてやってみようかという気持ちになった。

（池田）